

研究論文

アテネオリンピック競技大会における大会会場の活用状況に関する一考察¹

佐野 昌 行（スポーツ経営管理学的研究室）²

Abstract

Most of the venues of the 2004 Olympic Games in Athens are often discussed as negative legacies, necessitating an examination of such venues to enable a more effective utilization of venues following the 2020 Olympic Games in Tokyo. This study clarifies the process of the venue plan decision retroactively until the candidature stage of the Games and examines the utilization of the venues following the conclusion of the Games in Athens. The Official Report published by the Athens 2004 Organising Committee for the Olympic Games in 2005 and the official home pages were analyzed.

The results revealed that some venues were transformed into theaters, training centers, and so on for public use, and utilized effectively. However, the beach volleyball facility should have been constructed as a temporary facility, taking into account the utilization situation after the game, as the 2000 Olympic Games in Sydney could have been held in a contemporary facility. In the case of Athens, a long-term vision for sports promotion was lacking since before the candidacy, and even after the decision to host the 2004 Olympic Games was made, several changes were made to the plan for Athens. Therefore, some permanent facilities were built in the Helliniko, where large amounts of land were available from the ruins of the airport. This led to the creation of venues that could not be used adequately after the Games.

In Tokyo, where the 32nd Olympic Games are to be held in 2020, the effective utilization of venues after the game could be problematic. A detailed examination of the effective utilization of venues after the Olympic Games and the influential factors, drawing from the examples of cities that hosted the Olympic Games in the past is necessary to envision better planning and sports promotion for hosting future Games.

（受理日：2016年3月9日）

Keywords: Olympic venues, legacy, effective utilization

キーワード：オリンピック会場，レガシー，有効活用

¹ An Examination of the Effective post-Games Utilization of the Athens Olympic Venue

² Sano Masayuki, Sports Management

1. 緒 言

2020年の第32回オリンピック・パラリンピック競技大会が東京で開催されるにあたり、国内では競技会場に関する議論が活発になっている。なかでも大会のメインスタジアムとなる新国立競技場をめぐるのは、決定したデザインに対し景観や選考過程等の点から批判が相次ぎ^{1, 2)}、ついには2015年7月に安倍首相より建設計画の白紙撤回が表明された。その他の競技会場についても、バドミントンやバスケットボールの会場として予定されていた施設の新設が見送られるなど、東京大会の会場計画は2013年1月に提出された立候補ファイル³⁾に記されたものから大きく変更されている。相次ぐ変更により、選手村から半径8km圏内に集中するはずだった競技会場は分散し、もはや招致段階で掲げられた「コンパクト五輪」のコンセプトは失われたとみられている。

これら競技会場の変更に最も大きな影響を及ぼしているのが、経済的な要因であるといえるだろう。国際オリンピック委員会（IOC）は2014年12月にモナコで開催された第127次総会において、既存施設の活用や大会経費の削減を謳った「オリンピック・アジェンダ2020」⁴⁾を採択しており、これが東京大会における会場変更の背景となっている。新国立競技場をめぐるのは、当初予算1,300億円との条件でデザインコンクールが実施されていたにもかかわらず、開催決定後には総工費が3,000億円に達すると試算され、大幅な縮小計画を立てた後にも3,000億円を超えると見積もられたことに批判が集まった。莫大な建設費に対する批判は、上述した白紙撤回の引き金となったのである。その他の会場変更に関しても、IOC理事会での変更承認を伝える新聞報道では、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の事務総長による「1千億円の節約になるだろう」⁵⁾との発言や、トーマス・バッハ IOC 会長による「7億ドル（約880億円）の経費が圧縮された」⁶⁾とのコメントが掲載されており、大会運営の経済的な

面に関する関心の高さを裏付けている。

競技会場に関しては、整備にかかる費用のみならず大会後の有効活用の方策もまた、重要な検討課題となっている。大会後も維持管理のために巨額の費用がかかる大規模スポーツ施設には、それを賄えるだけの経済効果を生み出したり、周辺地域または国内におけるスポーツ推進の拠点としてスポーツ文化の向上に貢献することが期待されているのである。2000年にオリンピック・パラリンピック大会を開催したシドニーや2012年の開催地であったロンドンには、いずれも競技会場の有効活用を実現させた事例として紹介されることが多い。例えば民間シンクタンク、大和総研のレポートでは「シドニー大会とロンドン大会は跡地利用においても注目に値する事例である」として、シドニーにおけるオリンピックパークの活用とロンドンにおける大会会場周辺部および仮施設撤去後の跡地利用についてレポートしている⁷⁾。

一方、2004年の開催地アテネにおける競技会場の多くは、大会が遺した負の遺産として伝えられることが多い。アメリカの経済紙ウォールストリートジャーナルは、アテネ大会の会場の一部が大会後にほとんど使用されていない状況を伝えている⁸⁾。日本においても、2015年7月に日本経済新聞がアテネ大会の野球場やビーチバレーボール会場跡地の様子を写真と共に伝え、「巨費を投じた華やかな施設も、『夢のあと』を後世に残していくのは難しい」と報じている⁹⁾。筆者は2012年2月にアテネにある複数の会場跡地を訪れたが、至る所に落書きやごみの散乱が目立つなど、五輪会場の面影は感じられなくなっていた（写真1、写真2）。とはいえ、筆者はアテネ市内にあるすべての会場跡地を巡ったわけではなく、海外に伝えられる状況も断片的で、すべての会場の現況を詳細に伝えているものは見当たらない。

シドニーの会場跡地については、上述したほかにも笹川スポーツ財団の本間¹⁰⁾や財団法人自治体国際化協会シドニー事務所¹¹⁾によって報告されており、オリンピックパークだけでなくさまざ



写真 1 Athens Olympic Sports Complex の案内板（2012 年 2 月 13 日筆者撮影）



写真 2 アテネ大会のバレーボール会場となった Peace and Friendship Stadium の壁に描かれた落書き（2012 年 2 月 11 日筆者撮影）

まな競技会場における大会後の活用事例が紹介されている。ロンドンについても、笹川スポーツ財団の吉田¹²⁾や財団法人自治体国際化協会ロンドン事務所¹³⁾が、会場跡地における活用方針や国際大会招致の状況についてレポートしている。しかしながら学術的な研究に目を向けると、スポーツ推進の側面からオリンピック・パラリンピック大会会場の跡地の活用について検討した研究は、国内ではわずかに矢野らによって国立競技場の利用状況が学会で発表されたのみである¹⁴⁾。とりわけアテネについては、各種報道等で断片的にとりあげられるほかに、五輪会場の活用状況について検討した研究や報告は見当たらない。2020 年の

第 32 回大会開催を控える東京において、大会後の会場の有効活用について検討するためには、シドニーやロンドンにおける成功事例の報告を積み重ねるだけでなく、活用が進まないとされるアテネの事例を詳細に検討する必要があるのではないだろうか。

そこで本研究では、2004 年の第 28 回オリンピック競技大会（2004／アテネ）を対象として、大会の招致段階にまでさかのぼって会場計画決定までの経緯を整理したうえで、シドニー大会の会場との比較を行いながら会場跡地の活用状況について考察することを目的とする。

2. 対象および方法

本研究が対象としたアテネオリンピック大会の概要は、次のとおりである。

(1) 名称

第 28 回オリンピック競技大会（2004／アテネ）

(2) 日程

2004 年 8 月 13 日～29 日（17 日間）

(3) 会場

各会場の地図は図 1、各会場における実施競技および収容人数は、表 1 のとおりである。

なお本研究では、大会終了後にアテネオリンピック組織委員会によって発行されたオフィシャルレポート¹⁵⁾を主な分析対象とし、インターネット上の各種公式ホームページ等の情報をもとに資料調査を行った。

3. 大会招致の経緯

はじめに、第 28 回オリンピック競技大会の開催地としてアテネが立候補した経緯について、簡単に振り返っておきたい¹⁶⁾。

もともと 1896 年に第 1 回近代オリンピック大会が開催された地アテネでは、それから 100 年後となる 1996 年の大会への立候補が決まった。そこにはギリシャにおけるスポーツ施設やインフラ

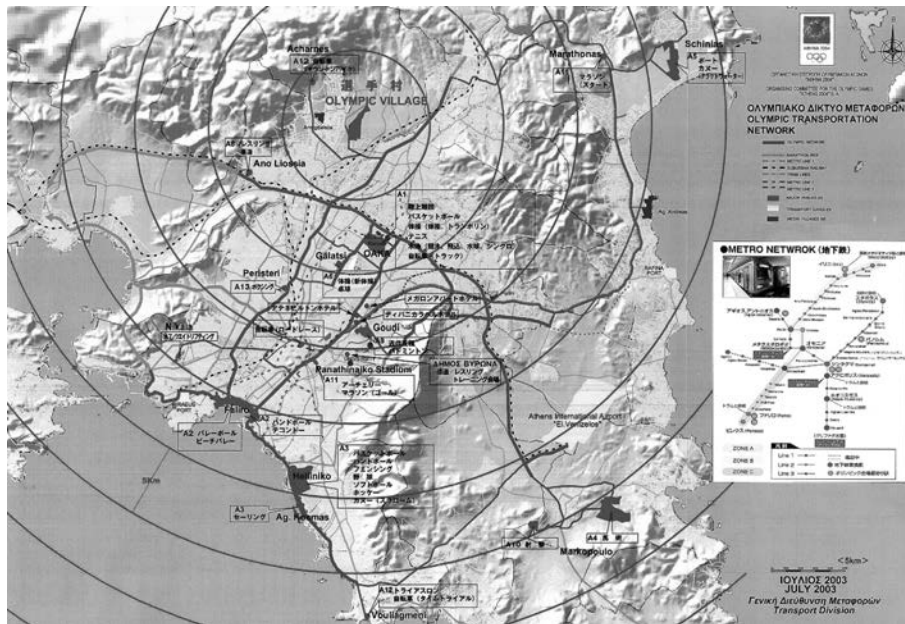


図1 アテネ大会会場配置図

日本オリンピック委員会（2003）第28回オリンピック競技大会（2004／アテネ）関係資料集／事前調査報告書. p.3より転載

整備の目論見も含まれており、立候補はギリシャオリンピック委員会（HOC）というより議会で決定されたものだった。立候補が決まった1986年当時、アテネオリンピックスポーツセンターにはオリンピックスタジアムしかなく、その他の施設の建設がただちに開始された。

1996年大会への立候補ファイルは1990年3月にIOCに提出され、同年9月に東京で開催された第96次IOC総会で開催都市の決定に係る投票が行われた。アテネは第1回目から3回目までの投票で最多得票を獲得したものの、決選投票の末アトランタに敗れ、1996年大会の開催地となることはなかった。

新設されたアテネオリンピックスポーツセンターでは1991年に地中海競技大会が開催され、この大会の成功がギリシャに大規模スポーツ大会の開催能力があることを示した。すると1995年の春、ギリシャ政府は2008年大会のアテネでの開催に向けて動き始めた。この動きは当初、IOCによるアテネの単独指名というかたちでの開催地決定に向けて進められた。しかしその実現にはオリンピック憲章の改正が必要であることから断念

され、1995年12月、2004年大会への立候補が決定した。1996年1月5日のIOCへの立候補表明は、締め切りのわずか5日前のことであった。その後も立候補ファイル提出までの期間は短く、ギリシャでは招致委員会の組織と招致プランの作成が急ピッチで進められ、1996年8月に立候補ファイルが提出された。

2004年大会の開催地決定投票は、1997年9月にローザンヌで開催された第106次IOC総会でされた。この投票でアテネは初回から最多得票を保ち続け、4回の投票を経て2004年大会の開催地に選出されたのであった。

以上の経緯をみると、2004年大会開催地への立候補が、アテネにおける長期的なスポーツ計画および都市計画に基づくものでなかった様子が浮かびあがってくる。1996年大会への立候補が、都市の視点ではなく100周年というオリンピックの視点に立つものであったうえ、1996年大会の招致に失敗してからは2008年大会の招致を目指し、それが叶わなくなったことで急遽対象を2004年大会に前倒ししているのである。こうした長期的なビジョンの不在と急ごしらえの開催計

表1 アテネオリンピック競技大会の会場

エリア	施設名		開設年	実施競技	収容人数
Athens Olympic Sports Complex	Olympic Stadium		1982	陸上競技 サッカー	72,000 人 72,000 人
	Olympic Aquatics Centre	Main Pool	1991	競泳	11,000 人
		Indoor Pool		水球	11,000 人
				飛び込み	6,200 人
		Synchronized Swimming Pool	2003	水球	6,200 人
	Olympic Indoor Sports Center		1995	シンクロナイズドスイミング	5,300 人
	Olympic Tennis Centre			バスケットボール	19,250 人
				体操競技	17,500 人
			トランポリン	17,500 人	
			Main Court	2004	テニス
	Show Court 1	1990	4,000 人		
Show Court 2	2,000 人				
Other Court3-9	各 200 人				
Olympic Velodrome		1991	自転車トラック	5,250 人	
Faliro Coastal Zone	Peace and Friendship Stadium		1985	バレーボール	13,200 人
	Sports Pavilion		2004	ハンドボール テコンドー	8,100 人 8,000 人
	Olympic Beach Volleyball Centre		2004	ビーチバレー	9,600 人
Helliniko Olympic Complex	Indoor Arena		2004	バスケットボール ハンドボール	15,000 人 14,100 人
	Fencing Hall		2004	フェンシング フェンシング	3,800 人 5,000 人
	Olympic Baseball Centre	Field 1	2004	野球	9,000 人
		Field 2		野球	4,000 人
	Olympic Softball Stadium		2004	ソフトボール	4,800 人
	Olympic Hockey Centre	Pitch 1	2004	ホッケー	7,300 人
		Pitch 2		ホッケー	2,100 人
	Olympic Canoe/Kayak Slalom Centre		2004	カヌースラローム	8,000 人
Goudi Olympic Complex	Goudi Olympic Hall		2004	バドミントン 近代五種（射撃, フェンシング）	5,000 人 3,000 人
	Olympic Modern Pentathlon Centre	Pool		近代五種（水泳）	2,500 人
		Riding Arena		近代五種（馬術, ラン）	5,000 人
その他	Karaiskaki Stadium		2004	サッカー	33,000 人
	Panathinaiko Stadium		1895	アーチェリー 陸上競技（マラソンゴール）	7,500 人 34,500 人
	Galatsi Olympic Hall		2003	新体操 卓球	6,500 人 6,500 人
	Olympic Sailing Centre		2004	セーリング	1,600 人
			2003	柔道 レスリング	9,000 人 9,000 人
	Peristeri Olympic Boxing Hall		2004	ボクシング	8,000 人
	Nikaia Olympic Weightlifting Hall		2003	ウエイトリフティング	3,500 人
	Parnitha Olympic Mountain Bike Venue		2004	自転車マウンテンバイク	12,800 人
	Schinias Olympic Rowing and Canoeing Centre		2004	ボート カヌーフラットウォーター	14,000 人 14,000 人
	Markopoulo Olympic Equestrian Centre		2003	馬場馬術 総合馬術 障害馬術	8,100 人 15,000 人 10,000 人
	Markopoulo Olympic Shooting Centre		2003	射撃	4,000 人

※ロード等で実施されるトライアスロン・自転車ロードとアテネ以外で実施されるサッカーの予選会場を除く
 Athens 2004 Organising Committee for the Olympic Games (2005) Official Report of the XXVIII Olympiad. および Athens 2004 Venues Fact Sheet (日本オリンピック委員会 (2003) 第 28 回オリンピック競技大会 (2004/アテネ) 関係資料集/事前調査報告書. p.5 所収) をもとに作成

画は、開催決定後の度重なる問題への直面や計画変更の要因になったと考えられる。

4. 会場計画の変更

アテネ大会における会場計画の大きな特徴は、立候補時点ですでに75%の競技会場と92%のトレーニング会場が使用可能な状態であるとされていた点である。それにもかかわらず、開催地決定後に競技会場は大幅に変更されることとなった。以下では、オフィシャルレポート¹⁷⁾を主な資料として、アテネ大会における会場計画の変更過程についてたどってみたい。

1998年3月のアテネオリンピック組織委員会創設と並行して、政府は会場立地の再検証を行った。その結果、競技会場の立地に関する二つの主要な変更が決定した。一つ目は、馬術会場のタトイ（アテネ中心部から北へ約20 km）からマルコプロ（アテネ中心部から南東へ約25 km）への移転である。マルコプロは、ファリロ（アテネ中心部から南西へ約6 km）から競馬場が新たに移転される場所であり、ファリロの競馬場跡地は今大会の主要な競技会場として有効活用される計画であった。

ところが、二つ目の主要な会場変更はそのファリロ地区に及んだ。当初、競馬場跡地には五つの会場を持つ多目的屋内施設が建設され、野球、ソフトボール、ビーチバレーボールの会場とともに会場群が形成される計画であった。しかしその後、施設の集中を避けるためファリロには沿岸地区のビーチバレーボール会場のほか二つまたは三つの屋内施設が新設されるにとどまることとされた。当初ファリロで開催予定とされたレスリングおよび柔道については、アノリオシア（アテネ中心部から北へ約11 km）に新設される会場での開催として、各競技連盟およびIOCに提案され承認された。政府は当初、ファリロで実施予定であった競技のアスプロピルゴス（アテネ中心部から北西へ約15 km）での開催を意図したが、この提案は

競技連盟およびIOCに拒否されていた。

これら2点の変更が決まった後にも会場の変更は相次ぎ、多くの競技会場が決定したのは大会まで残り3年となった2001年のことであった。さらにファリロ地区の開発について、馬術場および競馬場のマルコプロへの移転に関する契約が遅れていたため、ファリロの競馬場跡地に屋内競技施設を建設する計画には高いリスクが伴った。その結果、競馬場跡地への屋内競技施設の建設は見送られ、ファリロ地区にはビーチバレーボール会場のほかハンドボール及びテコンドーの会場となる体育館が一つ建設されるのみとなった。

残りの競技会場については、地理的な分散を防ぐためヘリニコ空港跡地に建設されることとなった。ヘリニコ空港は、2001年のエレフテリオス・ヴェニゼロス空港開設に伴い閉鎖された空港で、アテネ中心部から南へ約10 km、ファリロ地区からは南東へ約6 kmの位置にある。こうして、ファリロの競馬場跡地に建てられる予定であった二つの屋内施設と野球場及びソフトボール場が、ヘリニコ空港跡地に設置されることとなった。ここでの二つの屋内施設は、オリンピック航空の格納庫を改装して造られ、フェンシングとバスケットボールの会場となった。当初ここで行われるとされたバレーボールは、国際連盟及びIOCとの合意の後、既存のPeace and Friendship Stadiumでの実施となった。

ヘリニコ地区では、このほかにホッケーとカヌースラロームの開催が決まった。ホッケーは、当初の計画ではPeace and Friendship StadiumのとなりにあるKaraiskaki Stadiumで実施されることとなっていたが、最終的にはヘリニコの新設会場での開催となった。Karaiskaki Stadiumは、IOCとの討議により解体、再建のうえでサッカーの会場として使用されることが決まった。この決定が下ったのは、2002年のことであった。カヌースラロームについては、ボートおよびカヌーフラットウォーター会場となったSchinias Olympic Rowing Centreの近くに予定されていた会場が

認められず、ヘリニコでの新設となった。

立候補ファイルでバドミントンの開催が計画されていた Peristeri Indoor Hall では、ボクシング

が行われることとなり、バドミントンは近代五種とともにグディ地区（アテネ中心部から東へ約 4 km）での開催に変更された。ボクシング会場

表 2 シドニーオリンピック競技大会の会場

エリア	施設名		開設年	主な実施競技	大会後	大会中の最大収容人数	大会後の収容人数
Sydney Olympic Park	Olympic Stadium		1999	陸上競技・サッカー	常設	115,600 人	80,000 人
	Sydney International Aquatic Centre		1994	水泳	常設	17,500 人	8,500 人
	The Dome		1998	バスケットボール・ハンドボール	展示場	10,000 人	—
	Pavilion2		1998	ハンドボール・近代五種	展示場	6,000 人	—
	Pavilion3		1998	バドミントン・新体操	展示場	6,000 人	—
	Pavilion4		1998	バレーボール	展示場	6,000 人	—
	Sydney Super Dome		1999	バスケットボール・体操競技・トランポリン	常設	20,000 人	21,000 人
	Baseball Stadium		1998	野球・近代五種	常設	15,000 人	12,000 人
	State Hockey Centre		1998	ホッケー	常設	15,000 人	5,000 人
	New South Wales Tennis Centre		1999	テニス	常設	17,400 人	1,000 人
	State Sports Centre		1984	テコンドー・卓球	常設	5,000 人	3,800 人
	Sydney International Archery Park		1998	アーチェリー	常設	4,500 人	0 人
Darling Harbour	Sydney Convention and Exhibition Centre	Convention Centre	1988	ウエイトリフティング	展示場	3,800 人	3,000 人
		Sydney Exhibition Centre Halls 1&2		柔道・レスリング	展示場	9,000 人	—
		Sydney Exhibition Centre Halls 3		ボクシング	展示場	7,500 人	—
		Sydney Exhibition Centre Halls 4		フェンシング	展示場	5,000 人	—
		Sydney Exhibition Centre Halls 5		フェンシング	展示場	2,200 人	—
	Sydney Entertainment Centre		1983	バレーボール	イベントホール	11,000 人	10,000 人
その他	Blacktown Olympic Centre	Baseball Stadium	2000	野球	常設	4,000 人	500 人
		Softball Field		ソフトボール	常設	8,000 人	1,000 人
	Sydney International Shooting Centre		1999	射撃	常設	7,000 人	1,250 人
	Sydney Football Stadium		1988	サッカー	常設	42,000 人	41,000 人
	Dunk Gray Verodrome		2000	自転車トラック	常設	6,000 人	3,000 人
	Ryde Aquatic Leisure Centre		2000	水球	常設	3,900 人	800 人
	Equestrian Centre		1999	馬術	常設	50,000 人	2,000 人
	Sydney International Regatta Centre		1996	ボート・カヌースプリント	常設	27,000 人	1,000 人
	Penrith Whitewater Stadium		1999	カヌースラローム	常設	12,500 人	5,000 人
	Beach Volleyball Centre		2000	ビーチバレー	ビーチ	10,000 人	—
	Mountain Bike Course		1999	自転車マウンテンバイク	常設	20,000 人	—

※ロード等で実施されるトライアスロン・自転車ロード・セーリング、シドニー以外で実施されるサッカーの予選会場を除く

Sydney Organising Committee for the Olympic Games (2001) Official Report of the XXVII Olympiad. をもとに作成

が最終的に決定されたのは、2002年に入ってからのことであった。

以上、オフィシャルレポートをもとに施設決定までの経緯をたどったが、様々な要因により計画が二転三転した経緯がみてとれる。表1に示した施設の開設年をみると、1997年のIOC総会によりアテネ開催が決まった後に建設された施設はいずれも2003年以降に開設されており、開催年である2004年に入ってから開設されたものも少なくないことがわかる。相次ぐ会場計画の変更により、閉会後の後利用について十分に検討されないまま建設された様子がうかがえよう。特に今日、大会後の状況が問題視されている施設のうち野球場、ソフトボール場、ホッケー場、カヌースラローム会場はいずれも計画変更の末にヘリニコ地区に建設されたものであり、大会直前に広い土地を確保することができた空港跡地に設置したことが、その後の活用方法に影を落としていると言えるだろう。

5. シドニーとの比較による会場跡地の活用状況

表2には、アテネ大会の4年前、シドニーで開催された第27回オリンピック競技大会の会場一覧を示した。上述のとおりシドニー大会の会場は、ロンドン大会と並んで大会後に有効活用されている事例としてとりあげられることが多いものである。以下では、シドニー大会との比較に基づき、アテネにおける会場跡地の活用状況について考察してみたい。

シドニー大会の会場に関する特徴の一つとして、大会後に展示場として利用されている施設が2箇所含まれている点があげられる。ダーリングハーバーにあるSydney Convention and Exhibition Centerは、1988年に開設された展示場であり、オリンピック大会後の2007年にはAPECの会議が開かれている。大会期間中にはウエイトリフティング、柔道、レスリング、ボクシング、フェ

ンシングがここで行われた。もう一箇所の展示場は、シドニーオリンピックパーク内のThe DomeおよびPavilionである。オリンピック大会でバスケットボール、ハンドボール、バドミントン、新体操、バレーボールの会場として用いられるために新設された施設だが、大会後はスポーツ施設ではなく展示場として利用されており、大会中の観客席は仮設により設けられた。

これらの例のようにアテネにも、大会後に形を変えて有効活用されている施設はある。ウエイトリフティングの会場として用いられたNikaia Olympic Weightlifting Hallは、現在はピレウス大学の一部として活用されており¹⁸⁾、ボクシング会場のPeristeri Olympic Boxing Hallはサッカーチームが所有するトレーニング場となっている¹⁹⁾。アテネ大会の会場跡地の中で「唯一の成功例」²⁰⁾とされ、大会後の施設活用が評価されているのがバドミントン会場である。グディ地区に新設されたバドミントン会場は、その後改装されて2007年より「Badminton Theater」という劇場に生まれ変わり、地中海南東部で最大級の劇場として、数多くの演劇、ミュージカル、コンサート等を上演してきた²¹⁾。これらの例にみられるように、アテネ大会の会場のなかには国際競技大会の会場としてではなく市民に親しまれるかたちで有効に活用されている事例があることにも目を向けなければならない。

シドニー大会における会場利用のもう一つの特徴は、大会後も引き続きスポーツ施設として利用される会場において、大幅な観客席の縮小が行われている点である。既存施設の大会期間中における観客席の増設も多くが仮設により設けられており、大会後は元の規模に戻されている。大会期間中と大会後の収容人数は表2に示したとおりであるが、各施設の最大収容人数の合計が46万6,900人であるのに対し大会後の収容人数の合計は19万9,850人と、約42.8%に縮小されていることがわかる。

また、第26回大会（アトランタ）から初めて

実施されることとなったビーチバレーボールの会場は、シドニー大会ではビーチに仮施設として建設され、大会後にすべて撤去されている。ここに会場が設置された期間は、大会期間を含む2000年5月から10月のわずか半年ほどだけであった。一方、アテネ大会ではビーチバレーボール会場を常設施設として設置しており、大会後に活用されていない様子が批判の対象となっている。アテネ大会以前の仮設スタンドでの実施という前例を踏まえ、大会後の施設活用状況をながめると、アテネ大会においても仮設でのビーチバレーボール会場の設置が適切であったとみられている。

6. 結 語

アテネの都市計画に関しては、オリンピック・パラリンピック大会の開催に合わせたトラムの充実などのおかげで都市の発展が達成されたと評価される面もある。しかしながらスポーツ施設に関しては、招致前からスポーツの推進に関する長期的ビジョンを欠き、開催決定後も計画変更が相次いだことで直前になって広大な土地を確保できた空港跡地に恒久的な施設を建設したことが、大会後に会場跡地が十分に活用されない状況を生み出した大きな要因であるとみられることが明らかになった。

2020年の第32回大会を控えた東京においても、大会後の会場の有効活用は大きな課題となっている。今後も過去の大会会場の事例について、大会前のスポーツ推進に関するビジョンや計画の変遷を振り返りながら、大会後の活用状況とその要因について詳細に検討していく必要があるだろう。

注および引用・参考文献

- 1) 槇文彦・大野秀敏編著 (2014) 新国立競技場、何が問題か オリンピックの17日間と神宮の杜の100年。平凡社。

- 2) 森まゆみ編 (2014) 異議あり！新国立競技場—2020年オリンピックを市民の手に。岩波書店。
- 3) 東京2020立候補ファイル (日本語版) (2013)。
- 4) International Olympic Committee (2014) Olympic agenda 2020。
- 5) 朝日新聞。2015年2月28日夕刊。
- 6) 毎日新聞。2015年6月10日朝刊。
- 7) 水上貴史 (2014) 事例に学ぶオリンピック開催跡地の有効活用 シドニー大会・ロンドン大会にみる跡地の永続的視点。大和総研コンサルティング重点テーマレポート。
- 8) The Wall Street Journal オンライン版。2010年6月17日。 <http://www.wsj.com/articles/SB10001424052748704312104575298930393572128>。
- 9) 日本経済新聞電子版。2015年7月30日。 http://www.nikkei.com/article/DGXLASGM28H6M_Z20C15A7I00000/。
- 10) 本間恵子 (2015) シドニーオリンピックパークに見る有形と無形のレガシー：2000年シドニー大会がもたらしたもの。笹川スポーツ財団。 <http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/au/sportnews06.html>。
- 11) 財団法人自治体国際化協会シドニー事務所 (2003) シドニー五輪の概況と波及効果。CLAIR report (237)。
- 12) 吉田智彦。オリンピック・レガシーを考える～オリンピック・ロンドン大会の施設整備と後利用～。笹川スポーツ財団。 <http://www.ssf.or.jp/topics/london/index.html>。
- 13) 財団法人自治体国際化協会ロンドン事務所 (2013) 大会終了から1年余、ロンドン・オリンピックのレガシー (遺産) 形成の経過報告。 http://www.jlgc.org.uk/jp/information/monthly/uk_oct_2013_01.pdf。
- 14) 矢野裕芳・渡辺富雄・若色峰郎 (2011) 夏季オリンピック・メインスタジアムの後利用に関する研究その1—国立霞ヶ丘競技場における開催種目の実態調査より—。日本建築学会

2011 年度大会（関東）学術講演梗概集. 329-330

- ¹⁵⁾ Athens 2004 Organising Committee for the Olympic Games (2005) Official Report of the X X VIII Olympiad.
- ¹⁶⁾ Athens 2004 Organising Committee for the Olympic Games (2005) Official Report of the X X VIII Olympiad (1). 63-82
- ¹⁷⁾ Athens 2004 Organising Committee for the Olympic Games (2005) Official Report of the X X VIII Olympiad (1). 143-145
- ¹⁸⁾ Nikaia Building Complex. University of Piraeus. [http://www.unipi.gr/unipi/en/browse-](http://www.unipi.gr/unipi/en/browse-facilitie/nikaia-building-complex.html)

[facilitie/nikaia-building-complex.html](http://www.unipi.gr/unipi/en/browse-facilitie/nikaia-building-complex.html).

- ¹⁹⁾ The Atromitos FC Sports Complex. Atromitos FC Official Club Website. http://www.atromitosfc.gr/index.php?option=com_content&view=article&id=914:the-atromitos-fc-sports-complex&catid=60:stadium&Itemid=167&lang=en.
- ²⁰⁾ Penelope Kissoudi (2010) Athens' Post-Olympic Aspirations and the Extent of their Realization. The International Journal of the History of Sport²⁷ (16-18). 2780-2797
- ²¹⁾ Visit Information. Badminton Theater. <http://abcd.gr/en/>.